

晴れた日には出かけよう！
～まちのミリョクを再発見!!～

8

みょうけんぐう
「平井の妙見宮」

伝統ある韓流の宮



5月3日は「妙見まつり」。様々な逸話に彩られた極彩色の世界を堪能しましょう。



極彩色の妙見宮七星殿

妙見宮七星殿は、平井の谷ノ入にある東光院の境内、平井丘陵の小高い山の上にあります。山を登り、お宮を見れば韓国風の極彩色の美しい建造物に驚くことでしょう。関東近県でもほとんど例を見ないこの建造物の開創は非常に古く、西暦685年に遡ります。時の天武天皇に関東地方開発の勅命を受けた百済の豪族が、大和斑鳩の法輪寺の妙見菩薩を勧請し、当地に祀ったことが起源と伝えられています。

妙見様とは、星に対する信仰である妙見信仰に由来します。古くから民衆の守り神として広く信仰を集め、星々を人それぞれの運命とし、天の中心となる北極星を妙見菩薩として崇拝するものです。天の中心からいつも人々の営みを、心の底まで見通し今後の運命を左右するという北極星の力を称えた呼び名なのだそうです。

また七星殿の由来は、日夜地平線に沈まずに北極星の周囲を回る北斗七星のことで、北極星の眷属である七星菩薩とも、妙見様の宮殿ともいわれています。

幕末の頃までは、単立の妙見宮や、寺院の鎮守の宮として神仏が混ざり合う形で全国各地にありました。しかし明治に入り、政府の神仏分離令により多くの妙見宮が廃止されました。しかし、東光院の妙見宮は幸運にもそれらを免れ、現在に至ったのです。残念ながら当時の建物は明治15年(1882)の大久野焼けと呼ばれる平井川北岸の大火災により東光院とあわせて全焼してしまいました。現存のお宮は、昭和62年(1987)に百済の故地である韓国の資材と職人によって再建されたものです。



妙見宮菩薩さま

平井妙見宮にはこんな逸話が残されています。南北朝時代、足利尊氏が武蔵野で新田軍と戦い大敗し、秋留台地まで逃れてきた。味方の畠山国清が尊氏軍の壊滅を心配し平井妙見宮に籠って勝利を祈願した。すると追い詰められていた尊氏軍の形成が逆転し京に帰ることができた。その後、尊氏は室町幕府の基礎を固めることができ、そのお礼に東光院の前身となる別当寺に薬師如来坐像と寺領を納めたといわれています。



韓国伝統芸術団による舞踊「扇の舞」

毎年5月3日に行われる妙見まつりでは、国内では珍しい韓国舞踊農楽隊が付近を巡行するほか、境内の広場で優雅な韓国舞踊が披露され、異国情緒あふれる華やかな雰囲気になります。まつりは午前中から行われますが、東光院のご住職の話によると午後1時ごろからが一番盛り上がるそうです。またこの時期は、妙見宮の建つ小山の上へと登る参道周辺のヤマツツジが満開となり、ちょうど見頃となります。

アクセス

妙見宮へは「尾崎」バス停車、徒歩7分です。
平井川北の通りを西へ向かい、東光院境内奥の山頂になります。



日の出WALK (観光マップ) 【G-4】

